

◆2009年 1月

八木健選 「七句」

1. 寝違ひの首載せ歩く師走かな 久松久子
他人にはわからぬ辛さ 可笑しくも哀れ
2. キーワード忘れしままに年暮るる 奥脇弘久
忘れたのがパスワードならオレオレ詐欺防止に
3. 日記買ふたつた三日の思ひ出に 桜井宇久夫
来年は俳句手帳に流用できる奴を買いなよ
4. 初日の出倍の力で街照らす 有富洋二
「倍」で断定した思い切りがええ 初日は凄い
5. 嵐寛の天狗に近きマスク掛け 草薙一朗
新型のインフルエンザで嵐寛ウジャウジャに？
6. どこからを頭といふか木の葉髪 山口濤聲
マジックで線ひいても 仕方なかんべさ
7. 友遠方より来て風邪置いて去る 中沢荘荷
次回は強烈なのを手土産に持たせてお遣りよ

青山桂一

麻生やよひ

紅葉の散りし川面に鯉吐息
往還にどうでもせよと落葉臥し
逞しき下肢を見せたり大根どち

クリスマスツリーの星の落ちさうに
老紳士らいつせい咳く待合室
手土産はまづ仏壇へ聖果とて

足立淑子

有富洋二

コンペアーに乗せられ母の初詣
初夢や未曾有の文字にうなされる
寝正月させてもらえぬこのメタボ

有吉堅二

無器量の柚子の寄りくる風呂の中
雪女のおそるる地球温暖化
福笑ピカソも腰を抜かしけり

飯塚ひろし

手毬唄新婚初夜の触りなど
小姑がいびり出したる嫁が君
江戸つ子に本物僅かおでん酒

井口夏子

言ひ訳は咳の一つで始まりぬ
熱爛に喜怒哀楽はつきものよ
木の葉髪分け目はきつちり九三に

今城夏枝

時が吾を追ひぬいてゆく十二月
枯菊を焚く菊の香に酔ひしれて
湯豆腐の湯気客人をかくしきる

奥脇弘久

思ひ出もひとつふたつと冬至風呂
感情のかけらちかちか聖夜の灯
キーワード忘れしままに年暮るる

可知豊親

着ぶくれて妻存外な事を言ふ
着ぶくれて妻は恰も牢名主
女房も畳も替へてしまひけり

加藤澄子

忙しい年だつた冬至の湯に浸かる
電飾の明滅忙し不況の街の
懐かしい声聞くためのお歳暮よ

倉方 稔

短日や電波時計は音出さぬ

初日の出倍の力で街照らす
晴れ晴れと寝正月を決めている
雪だるま下がり目になる昼下がり

安藤淑子

裏方さん苦しみますよクリスマス
忘年会うつかり二度目の姓で呼ぶ
師走女にOFFのスマッチありません

井口寿々子

木枯しなどどこ吹く風と井の蛙
着メロを子守唄に替え年忘れ
聖樹点灯今や遅しと五番街

稲沢進一

晴れた日にまさか雨音木の実降る
くさめして駒の消えたる将棋かな
数の子や頑張ることはもう止める

越前春生

ここだけは相場の上がるお年玉
歳晩のますます尖る地獄耳
あれこれと迷ひて買はぬ年の市

笠 政人

惑ひ箸おでんの種のくさぐさに
大方は素通り夕の慈善鍋
晴くもり雨風地震古日記

加藤 賢

理髪後の顔気に入らず冬帽子
株価また上ると信じ日向ぼこ
うつかりと物買ふ聖歌賑々し

草薙一朗

嵐寛の天狗に近きマスク掛け
ミ二千両箱の隈なき熊手買ふ
蒟蒻派はた大根派おでん酒

小杉 隆

梟の林に潜る横浜線

背に受ける追ひ出し太鼓師走風
曖昧に歳重ね来て師走なり

桜井宇久夫

小うるさき大家ほめたる冬一句
日記買ふたつた三日の思ひ出に
年の瀬やむさぼり食らふ薄きパン

佐藤古城

梢火掻き好きなお方を燻しけり
アホウ阿呆と讃め尽くしけり寒鴉
梅にや早いが兜太迎へに鮫が来た

佐野ゆきこ

ジッと見る犬の目に耐え食事する
仏壇の供物狙って犬テンテン
優勝旗持ち帰る子ら道一列

首藤虎男

天文屋月よりの使者で地球丸映し
初場所や賜杯手にする大和なし
初夢やひねりそこねは句にならず

壽命秀次

子に振られ猫逃げうすや湯婆抱く
命名の榎 窓辺に真央と遼
パドックに駄々捏ねる馬菊花賞

高田敏男

温め酒ボジョレーヌーボーなど知らず
山と川吉良の屋敷の雪景色
美形など他人事だよ福笑い

高橋真紀子

ゴジラのワタシ霜柱ふみつぶし
福笑い誰かの顔になつちやつた
パソコンの賀状一瞬に送信す

田代青波

焼芋屋ぴいと悲しき音鳴らす
そば通る舟に鳩身じろがず
水鳥を見つつ湖畔の足湯かな

茶の花と嫁に送らる冠木門
株下りあとは頼みの福は内

佐治洋一

師走行く僧の足元白ズック
朝まだき黒き犬たち息白し
マフラーで首をしめたり聖歌隊

佐野萬里子

嬰生るるその泣き顔を賀状にす
パソコンの賀状二重に出してをり
紅葉は賞でて朝夕落葉掃

清水吞舟

千両も万両もあり後継がず
如何にせん修行の婿のふぐと汁
絵双六己が来し方見る如し

白井道義

マスクして寄席の落語の大欠伸
宝くじ売場に恩師師走来る
河豚鍋を早取り仕切る鍋奉行

杉村福郎

漱石忌廁半ばに子は眠り
めくりては余生を減らし古暦
年の瀬や人みな忘る臍の垢

高田菲路

おでん煮て妻また留守をするらしく
ちよこまかと鴨白鳥の餌を狙ふ
煙草に火点けてくれとて蓮根掘

高橋素子

老いるとは美しきことなり枯尾花
葱背負はぬ身の軽々と鴨泳ぐ
出番なり戸棚の煤け七福神

田中章子

干支になき猫ふて寝する年の明け
ロボットもそつと手を出すお年玉
初夢や覚めて夫のうとましき

種谷良二

涙ぐむおでんの辛子鼻に抜け
山積みのケーキはけずに聖夜ふけ
寝てる間に境を超える去年今年

長井知則

干し柿や揉んで母を思い出し
幼きに登りし山や初冠雪
孫が真似ストーブにあたる爺仕草

永島唯男

何となく煙たき人の落葉焚
巻舌を巻込みてする紙マスク
どん底のどんの泥より泥鰯掘る

根岸敏三

畳替え小さく丸く部屋の隅
前聖夜聖書は遠く街の中
飾売り小さき物ほど高き声

久松久子

寝違ひの首乗せ歩く師走かな
大空の窓となりたる風一つ
山の子のおどける一人狸なり

藤岡蒼樹

干柿の謂二六二蹴の貌
日向ぼこ額眼鏡にしてゐたり
銀杏の袋父子の数比べ

藤森荘吉

寝たふりといふ手も使ふ年の暮
忘年会締めの一と言何回も
年賀状凝りに凝つたり定年後

堀川亮二

愛犬の散歩反故する年の暮
ぶくぶくとをどり出したるおでん鍋
二人居におでんの鍋の大きけり

松井 勉

川舟で渡る夢覚め去年今年

飛田正勝

年忘れ喜怒哀楽の顔揃ふ
残生の十年日記買ひにけり
風の関所破つて通りけり

中沢荘荷

友遠方より来て風邪置いて去る
妻風邪でさてチンと云ふ器どう使ふ
作文はもつとも苦手冬休み

西をさむ

十二月減多矢鱈と暇な人
クリスマスアダムが僕で妻がイブ
掃納ついでに妻に掃き出され

原田 暉

武家屋敷町を焼芋売通る
籤引いてティッシュいただく師走かな
ひとときを床屋で睡る年用意

日根野聖子

これ以上の省略は無し枯木かな
わだかまりほどけぬままや枯葎
やる気有る無し全く不明の海鼠かな

藤原セツ子

冬苺つるの絡まりこぼれゐる
「お早う」の白い字書けさう白い息
全身の力吐き出し咳続く

二神重則

毛糸をば硬く巻くなと二人かな
冬の雷こうでなくては日本海
年の暮れオレより怖いワタシから

前川敏夫

闇汁や句敵の腹探ぐりあひ
煤逃げをむしろ歓迎されてをり
年用意物のせられぬ棚づくり

三木蒼生

ぺらぺらと喋るは何語すきま風

去年今年蹴られし棒の如き脚
飼猫の野良連れて来る去年今年

三塚美恵子

鏡見て鬱になりたる年の暮
煤の日の段取り前のふて寝かな
負け猫の白毛舞ひし枯れ木道

虫倉蟬音

大き目の蝶ネクタイや飾売
年の市男黙つて荷物持ち
煤逃や胸に温める酒の瓶

村上美和

登り竜の如き参列お元日
迎へ酒始まつてある二日かな
初夢を語れば運の逃げさうな

山岡冬岳

覚めて又二幕目となり宝船
宝島見えて醒めたる宝船
宝船醒めて再び船出かな

山口 涛聲

雪の夜の雪もぐり込む身八口
どこからを頭といふか木の葉髪
吹雪かれて腰据ゑてをり理髪店

山本あかね

聞くための冬帽子より耳を出し
お大事にと薬と風邪を貰ひけり
息子への賀状一番先に書く

山本 賜

黒帯の霜困なり九段下
晩秋を時速二七〇キロで
待つ人のしぐさいろいろ冬の駅

吉田恵子

初鏡眼鏡をかけて見直せり
鼻つまみ七草粥を食べる子ら
仕事明け女三人屠蘇を飲む

滑稽を国旗と違ふ初電話
お降りは誰のお下がりかと聞かれ

三橋真砂子

北斗星七つまる見え露天の湯
プラタナスやんちやの如く落葉踏む
布団干すわが身も干すしぬ裏表

むつみ

賽銭の頭に当たる初詣
宝船よくよく見れば底に穴
野施行の前に泥棒持ち去れり

百千草

年初欄まとも空ぶり日記果つ
意地少しけふは通して葱刻む
鉄火肌み並ぶ婆の大根畑

山口えつこ

振りむけば足踏み増える懐手
数え日やただ置くだけの旅鞆
咳ひとつして夕暮のセレブ街

山下正純

堰越への順番待ちす落葉の子
客人となりぬ小さき枯葉かな
一年で時効成立年忘れ

山本けい子

息白しスタート前の走り込み
電撃結婚五十年の煤払ふ
追加買ひ景品の湯たんぽ欲しくつて

横山喜三郎

干布団うつぶん晴らす大き音
茸狩鍋には誰も手をつけず
しぶとさも処世のうちや木の葉髪

吉野香風子

子を叱る母の声して十三夜
稲架組んで見えなくなりし嫁の里
噴水に休日のある大暑かな